
Replay Refrain Request

棒人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e p l a y R e f r a i n R e q u e s t

【Nコード】

N 4 8 9 5 Y

【作者名】

棒人間

【あらすじ】

あ、あらすじ…？

えーと

「『ゲーム』クリアを目指して優介くんが頑張る気がします。
頑張ります。

(・x・)>優くんえいえいおー。」

b y 詩乃ねーちゃん

だそうです。

詩乃さんは頼りになるおねーちゃんですね。

始まり

ああ この感触…。

もう大分慣れた…。慣れてしまった。

人間の適応能力を恨むことになるなんて。

…いや慣れなかったらやってられないな。

服の汚れを取り、両手に着いた汚れを拭く。

手を擦ってみるが汚れが落ちない。落ちてない気がする。

ところであと幾つだろうか？

細い路地裏を小走りして離れる。

ふと寂れた小さな電化製品店のショーウィンドウを見た。

其処には最近世間を騒がす連続殺人事件のニュースが流れていた。

もうすでに8人の犠牲者が出ているとのことだった。

「…捕まるのだろうか」

TV画面には人相や服装、特徴が映し出されている。

空は鈍色でどんより。もうじき一雨くるな。

つと…そんな事より今夜中に済ましてしまおう。次は…。

黒く塗り、光消しで曇ったナイフを取り出す。

…これがラスト。やつとこのゲームから開放される。

名も知らない君、すまないな。

麻痺した心の中で謝罪をする。

罪悪感はあるが何処か他人事のような感じだ。

後ろから忍び足で走り、そのままの勢いを殺さずに一気に掻き切る。

血が飛び散り視界が赤く染まる。全てが終わった事を感じた。

安堵からだろうが全身が脱力して膝を付いた。

ああ… やつと終わったんだな…。

「お疲れさん。」

男は目を閉じた。

「やれやれ、早速のお出ましで危なかったなあ。」

彼はそう呟き「紙」を眺める。

其処には「ゲーム」のルールが書かれていた。

「『犯罪者を10人に達するまで殺し続けなければお前の周りの人を殺す』ね。」

彼は暫く紙を眺めてからくしゃりと潰してポケットにしまった。

何故こんなものに巻き込まれたんだ。
こんなの「あり得ない」のに。

既出の事

早足で歩いて行く。

ふと思い出し、回れ右をして普段なら使わない道を通って帰る。

今日は大回りして帰らなければならないと「知っていた」からだ。

「またかよ…。」

遠回りして帰ったのでいつも以上に時間が掛かった。

「ただいま。」

「おかえり、優介。遅かったわね。」

「ちょっと本屋で立ち読みしててね。」

適当なそれらしい嘘をつく。まさかさっきの事を話す訳にもいかない。

「そう。ご飯出来てるから手洗っておいで。」

「はいはい。」

「『はい』は1回!」

「はい、わかりましたよー。」

「こらー！伸ばすなー！」

詩乃ねーちゃんはー々細かいんだよなあ。

隅々までよく擦り合わせて手を洗う。

ま、こんなもんでいいだろ。

「ごちそうさま。」

いつも通り早食いの俺はもう食べ終えた。

「お代わりあるよ？」

「ありがとう。でも遠慮するよ。」

「そんなんじゃないよ？」「

「成りたく無いっす。」

自分の食器を片付け自室に戻る。

そつえば今日は宿題が有ったな。

珍しく机に向かう。普段なら授業前の休み時間にやっているのだが、今日は今やっついてしまいたい気分。

「お休みー。って優介が勉強してる！」

「なんでびっくりしてのさ。」

いつも勉強しろ、とか言ってるのに。

「だっていつもは『学校でやってるから』。』とか言ってやんないじゃん？」

「今日はそんな気分だったんだよ。」

「ふーん。ま、慣れない事はあんまりやらない様にね。もう遅いし早く寝なよねー。」

ふむ。勉強やると今度はやるなどは。一体どうすりゃ良えんじゃ！

扉を閉めて詩乃ねーちゃんは部屋に戻った様だ。

「つと…。集中してたらこんな時間だったのか。」

短い針が11時だということを教えてくれた。

こんなこと本当に珍しい。

だって『もう6回も同じ問題を解いたのだから、答えなんてとうの昔に知っているのだから』。

何故時間割いてやってんだろ。

さっきだって宿題に集中してた訳じゃない。

頭をフル回転させたからだろう。

もう眠い。

さっさと寝てしまえ。

『また』明日から頑張ろう。

そう思いながら床に着いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4895y/>

Replay Refrain Request

2011年11月20日16時41分発行